

品目	1 削除	2 過酸化ナトリウム
廃棄方法		(1) 中和法 水に加えて希薄な水溶液とし、酸（希塩酸、希硫酸等）で中和した後、多量の水で希釈して処理する。
生成物		
検定法		pH メーター法、ヨウ素滴定法
その他		容器を開ける時は噴出することがあるので保護眼鏡を必ず着用すること。

3 過酸化尿素及びこれを含有する製剤	4 削除
(1) 希釈法 多量の水で希釈して処理する。	
H ₂ O ₂ CO(NH) ₂	
滴定法	

5 ジクロル酢酸	6 トリクロル酢酸
(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共にアフターバーナー及びスクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するのに適したものであること。	(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共にアフターバーナー及びスクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するのに適したものであること。
ガスクロマトグラフ法	ガスクロマトグラフ法

7 トルイジン	8 トルイレンジアミン 2,4-ジアミノトルエン
(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共に焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 (2) 活性汚泥法	(1) 燃焼法 (ア) 焼却炉でそのまま焼却する。 (イ) 可燃性溶剤と共に焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 (2) 活性汚泥法
ガスクロマトグラフ法 吸光光度法	ガスクロマトグラフ法 吸光光度法

9 二硫化炭素	10 ブロム水素を含有する製剤
(1) 酸化法 次亜塩素酸ナトリウム水溶液と水酸化ナトリウムの混合溶液を攪拌しながら二硫化炭素を滴下し酸化分解させた後、多量の水で希釈して処理する。 ア $\text{CS}_2 + 6\text{NaOH} + 8\text{NaClO} \rightarrow \text{Na}_2\text{CO}_3 + 2\text{NaSO}_4 + 8\text{NaCl} + 3\text{H}_2\text{O}$ イ 発熱反応なので還流冷却器を付し二硫化炭素ガスが外へ漏れないよう注意する。 ウ 反応容器の気層中の二硫化炭素ガスの検知を行う。 (2) 燃焼法 (ア) スクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 (イ) 建物や可燃性構築物から離れた安全な場所で冷えて乾いた砂又は土の上で少量ずつ場所を変えて燃焼する。 〈備考〉 ア (2) - (ア) のスクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いること。 イ (2) - (ア) の焼却炉の火室の温度を予め 800°C 以上にしておき 3 kg/cm^3 以上の圧力で噴霧燃焼させること。 ウ (2) - (ア) の二硫化炭素は水圧で圧力をかけること。 エ (2) - (ア) のバーナーと二硫化炭素貯槽の配管の途中には必ずステンレス製の逆止弁をとりつけておくこと。	(1) 中和法 水酸化ナトリウム又は消石灰の水溶液で中和した後、多量の水で希釈して処理する。

Na ₂ CO ₃ Na ₂ SO ₄	NaBr 又は CaBr ₂
吸光光度法	pH メーター法
ア 沸点が 46.2℃と低いので極めて蒸発しやすく中毒をおこしやすいので注意する。 イ 引火点が－30℃、発火点が 100℃と発火しやすく、爆発範囲が 1.3~44%と極めて広いので、火気の手扱いや高温物体と接触させないように十分注意する。	

11 ベタナフトール	12 削除
(1) 燃焼法 (ア) 焼却炉でそのまま焼却する。 (イ) 可燃性溶剤と共に焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。	
吸光光度法 高速液体クロマトグラフ法 ガスクロマトグラフ法	

13 削除	14 メタノール
	(1) 燃焼法 (ア) 珪そう土等に吸収させ開放型の焼却炉で焼却する。 (イ) 焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 (2) 活性汚泥法
	吸光光度法 ガスクロマトグラフ法

15 モノクロル酢酸	16 沃化水素を含有する製剤
(1) 燃焼法 可燃性溶剤と共にアフターバーナー及びスクラバーを具備した焼却炉の火室へ噴霧し焼却する。 〈備考〉 ア スクラバーの洗浄液にはアルカリ溶液を用いる。 イ 焼却炉は有機ハロゲン化合物を焼却するのに適したものであること。	(1) 中和法 水酸化ナトリウム水溶液で中和した後、多量の水で希釈して処理する。
	NaI
ガスクロマトグラフ法	pH メーター法